

JISS所報

2008年03月31日発行・・・所報No.342

目次

働きながら子育て

龍円 恵喜二

68回、69回、70回スウェーデン研究連続講座

68回

スウェーデンの刑務所に働いて — 監視と更正のバランスの難しさ

グニラ・グレン
 ルッツゲル・グランベル
 イ

69回

スウェーデンの生涯教育 — スウェーデンと日本の最前線から

野崎 俊一

70回

スウェーデンの医薬業界と日本のパートナーシップ — 新たな展望に向けて

ヨハン・ウエストブラッド

スウェーデン語に教わったこと

林 壮行

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所 所報
 No.342 2008年03月31日発行

発行所: 社団法人スウェーデン社会研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1

(株)科学新聞社内5階

連絡事務所

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7

Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596

e-mail: sweden@tkm.att.ne.jp

URL: <http://www.sweden-jiss.com/index.html>

発行人・編集責任者: 林壮行

Publisher&Editor in Chief: Takeyuki Hayashi

編集者: 久保田健司

Editor: Kubota Takesh

働きながら子育て — 少子化時代の女性たち・・・スウェーデンと日本

帝京大学名誉教授
龍円 恵喜二

第1章 女性の高い就労率と低い子供の出生率

(1) 低かった女性の就労率(～1960s)

スウェーデン語には、ヘンマ・フル(hemma fru)という言葉がある。日本語に直訳すれば、(家にいる主婦)すなわち専業主婦ということになる。しかし、このスウェーデン語には、ある種のニューアンスが含まれている。辞書にもでてこない。それは使われた文脈を知らないと、分からない。家にいて子育てや家事だけしかしない、社会参加できない遅れた女というニューアンスが含まれているのである。友人たち夫妻が我が家に集まり、よく夕食を共にしたが、そこでも、日本の遅れた女が、しばしば話題となった。日本女性であるわが妻は、専業主婦が如何に大事か、幼児期から成長期にわたって、母親が家にいることが、子供の心の安定的成長にとって大事だ、と反論していたが、それはどちらが正しいと言うような結論を出せるような議論ではなかった。それでも、スウェーデン人女性から見れば、家にいて、子育てと夫のめんどうを見るだけの女は、どうしても遅れた女に見えるのであろう。

以上は、1960年代のスウェーデンでの話である。確かに、その頃の日本の女性が結婚しても、仕事を止めず、働きながらキャリアを追求し、子供を生み・育てる、と言う話は聞いたことがない。やはり、仕事を止め、そして結婚し、子供を持ち、育てる、というのが平均的パターンであった。

僕は、青年時代(1960年代初期)の3年9ヶ月、広島東洋工業(現マツダ工業)で働いたことがある。女性も働いていた。しかし、若い未婚の女性だけだった。それも結婚すれば止めたし、子育てしながら働くというのは、ただ一人の例外だけだった。その例外さんは、ハワイ帰りの二世で、英語の翻訳をやっていたが、やがて、退職し、ハワイに帰っていった。おなじ課に、アメリカのミシガン大学の修士号を持った女性がいた。「貴女は、修士だし、僕らより良い給料なんだろう？」ときいたことがある。その時の彼女の表情が、今でも忘れられない。「言いたいけど言えないよ！」と言う無言の怒りの顔であった。僕が会社を去る時、彼女も、辞めて、アメリカに渡った。結婚の相手はアメリカにいる日系人であった。おなじ会社にいる日本男児はごめんこうむる、と言うことだったようだ。ハワイ帰りも、ミシガン帰りも、男性に劣らない実力の持ち主だったが、日本人と結婚して、日本に住みつくと言う考えには、はなれなかった。自分のキャリアをあきらめ、専業主婦、つまりスウェーデン風にいえばhemma fru にはなれなかった例外的日本人女性であった。

実はスウェーデンの女性達もhemma fruであった。女性が、職場に進出し、キャリアを求めて、働き続けるし、働きながら子供を生み育てる、と言う話は、スウェーデンでも、まだまだまれな話であった:(そのことは表1から類推できることである。)。hemma fru と呼ばれる専業主婦が多かった。やはり女は家にいるものであり、キャリアを求めて、労働市場に出る、と言う雰囲気ではなかったのである

(2) 変化の兆し、女性の高学歴化

しかし明らかに変化の兆しは見えていた。それは、高学歴の女性が、少数とはいえ、既に採用されていたということだ。(たとえキャリア成就の見込みがないとはいえ)広島のような地方都市の大企業で、大卒の女性が既に働いていたと言うことは、時代の変化の兆しを示していたのである。

僕は、1964年に東洋工業(現マツダ工業)をやめた。みかんの皮の浮かぶ薄汚い横浜の港からソ連のナホトカに渡った。「この大地を渡れば、ヨーロッパにつながっている。」そんな気持ちで、渡った。そして長い長い、汽車の旅を続け、モスクワを越え、ヘルシンキを越え、スウェーデンのストックホルムで、財布の底がつかた。そしてそのまま居ついてしまった。

その頃のストックホルム大学の学生の1/3は、女子学生であった。スウェーデンでは、男女とも高学歴化が現実のものとなりつつあった。

他方、私が卒業(1960年)した日本の大学の経済学部には、女子学生が一人しかいなかった。彼女は色が黒かったので、黒1点と呼ばれていた。即ち、ことそれほどに日本女性の高学歴化は遅れていたと言うことである。しかも「紅1点ではなく黒1点」と呼ぶところにも女性蔑視が見えていた。とは言うものの、文学部には女子学生が目立つようになっていた。

他方、スウェーデン経済は、日本経済と同じく高度成長を成し遂げ、その成長率は、日本とトップを争っていた。数度のスウェディッシュ・イノベーションと呼ばれる技術革新をやり遂げ、ヴォルボやサーブ、エリクソンといった国際的大企業が羽ばたいていた。大学を出た女子学生も、労働市場へ吸い込まれるように、大勢で進出して行った。

日本の女子学生も、スウェーデンより遅れてはいたが、それでも確実に増加し、やはり労働市場に進出していった。前述した黒1点さんも高校の先生になった。先生の方針が、その頃の女性に解放された数少ない分野だったからだ。

(3) 高くなった女性の就労率(1960s~2000s)

日本・スウェーデンともに、1900年代後半から、2000年代の今日まで、経済成長は著しく、日本はGNPの成長率で、スウェーデンは一人当たりのGNPの成長率で、それぞれ先進国間で、第一位の座を分け合っていた。

経済の高度成長は、大きな社会変動を引き起こした。つまり、経済成長は、猫の手も借りたいほどの労働不足を招き、女性は専業主婦として家にとどまるより、労働市場に出て行く方を選んだ。

経済成長の原動力となったのは技術革新であり、知識集約型産業の発達であった。それは高い知的水準の労働力を必要とした。その結果、高学歴の女性たちもどんどん労働市場に、進出するようになったのである。そして働きながら、家事と育児をこなすと言う二重労働の重荷を背負って、女性たちは頑張って生きて来たのである。

表に見られるように、女性の労働市場への進出は、時代とともに増加の傾向がうかがえる。

(今日、北欧が8割であり、日本は6割である。表1を参照してください)

表 1・・・女性の労働市場への進出状況

注: 16歳から66歳までの働いている女性で、10歳以下の子供を持つ女性

	1960年代 (専業主婦がまだ多かった)	1970年代	2000年代 (共稼ぎが増えた)
スウェーデン	4割		8割
デンマーク	4割	5割	8割
日本	3割(推定)	5割	6割

(4) 低くなった出生率: 少子化傾向

女性が労働市場に出て行き、働くというのは、先進国に見られる一般的傾向である。北欧も日本も例外ではない(表1を参照してください)。

しかし、働きながら、子供を生み・育てると言うのは、女性にとってはきつい。という事は、北欧や日本の女性が、かつての様に、平均して5人から6人の子供を生み育てる、という事は無理である。つまり、子供の数は、減っていかざるを得ない。出生率は下がっていかざるをえない。

日本とスウェーデンの出生率の推移を見ると、日本は、1960年代の約2から、今日2004年の1.29にまで下がっている。しかし、スウェーデンに関しては、1964年の2.3から、1980年の1.5近くまで、下がったものの、その後歯止めをかけることに成功し、2004年には1.75までに回復している。つまり、少子化に歯止めをかけることに成功しつつある。

歯止めをかけたスウェーデンと継続落下を続ける日本の、少子化対策の違いがあることが予想される。

第2章: 少子化傾向に歯止めをかけたスウェーデン

なぜ、働きながら、子供を生み育てることが、可能となったか?

以下にスウェーデンのとった家族政策のさわりの部分を紹介しておきます・・・表2を参照しながら読み下してください

さい。

なぜ、働きながら、子供を生み育てることが、可能となったか？という、それは、政府がつぎのような家族支援政策を採ってきたからである：

- ・保育所を設けることは地方自治体の義務である。保育所はどこにでもある。待機児童は存在しない。
- ・出産・育児の際は、育児休暇が取れる。
- ・その間の所得保障(両親保険、家族手当、児童手当、住宅手当)もある。

(流入してきた移民も家族支援政策の恩恵を受けている。)

- ・政府は男女共同参画政策を採っている：従って、男も家事や子育てを分担するのがあたりまえである。
- ・同棲などの事実婚は法律婚と同等とみなしている。同棲中の大学生でも、安心して子供を作り、妊娠したら、さっさと独身寮から、家族寮に移る。そして子育てをしながら、勉強ということになる。保育所のおばさんには大助かりである。

表2・・・育児休暇・所得保障(両親手当・児童手当)

	日本	スウェーデン
育児休暇	原則として1歳未満まで親が休暇を取れる。	1歳6ヶ月まで、親が全日休暇をとれる。子供が8歳(小学一年)まで分割(1/4、2/4、3/4)取得する方法もある。
所得保障(両親手当)	休業前賃金の40%相当が支給される。	両親が取得する合計休暇日数480日のうち、390日は所得の80%、残りの90日は一日60Sw.kr(約900円)が支給される。
所得保障(児童手当)	小学3年修了時まで支給される(06年4月から小学6年終了時まで)。第1子と第2子は5千円/月、第3子以降は1万円/月を支給される。所得制限あり。	16歳未満まで支給される。第1子(06年4月から小学6年終了時まで)。第1子と第2子は5千円/月、第3子以降は1万円/月を支給される。所得制限あり。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

第68回 スウェーデンの刑務所に働いて — 監視と更生のバランスの難しさ

スウェーデン シースベリ刑務所 刑務官
グニラ・グレン
ルトゲル・グランベルイ

私たちの仕事

1913年に設立されたマルメ市の中心にあるKirsberg(シースベリ)刑務所は、現在はスウェーデン全体で約5000名の収監者のうち160名を収容している。収監者の刑期には1年から終身までである。スウェーデンの刑務所の保安は、レベルの高さに応じてAからFまでの保安レベルがあり、Kirsberg刑務所はCレベルに分類されている。そのなかで私(R. Granberg=ルトゲル・グランベルイ)は、収監を開始する人の受入棟と、品行不良な収監者のための矯正棟で働いている。主な任務は棟の保安で、スウェーデン南部地域の暴動制圧チームのメンバーも兼任している。また私(Gnilla Green=グニラ・グレン)は、犯罪者プログラムのトレーナーとして勤務するとともに、収監者が刑務所外で受ける治療の計画や釈放準備を担当している。

スウェーデンの刑務所と保護観察部門の歴史

19世紀には、スウェーデンの刑務所は外部から隔離されていて、収監者は刑務官や聖職者としか話すことが許されていなかった。この状態は1945年まで続いたが、その後、収監者は収監棟の中で一緒に収監されるようになり、1974年には刑務官の職務に関する基本法が国会で可決され、矯正業務はできるだけ最小限の介入に留め、収監者は刑務所外の生活に備えるべきであるとする考えが支配的になった。スウェーデンでは、平時に犯された犯罪に対する死刑は1921年に廃止されたが、戦時に犯された犯罪に対する死刑が廃止されたのは1973年である。

犯罪行為と刑罰

スウェーデンの刑務所と保護観察部門は拘留、刑務所、拘留のないケアの3分野に分かれている。刑に処せられるのは15歳からで、15歳未満の少年犯罪者は社会事業が扱う対象となる。拘留の対象となるのは15歳以上であるが、全ての容疑者に対し拘留が行われるわけではない。拘留のないケアの処分は、保護観察、監督、強度の監督、コントラクト療法、およびコミュニティ奉仕活動である。

保護観察は通常、罰金と併合された刑罰で、収監や監督はされないが、2年間の保護観察期間の間に別の罪を犯したときにはさらに厳しい刑罰を科せられることを意味する。

監督は保護観察より厳しい刑罰で、期間は3年間である。最初の1年間は週1-2回の保護観察のないケア部局との定期的な接触を義務付けられる。1年経過するとその後の2年間は保護観察期間となる。

社会的な意味で生活の場が整っている者が6か月以下の禁固刑に処せられたときには、刑務所で服役する代わりに強度の監督の刑を申し込むことができる。強度の監督は自宅滞りに制限され、受刑者の位置を登録した電子チップを内蔵したアンクレットを使用して行われる。薬物依存のある者は強度の監督を選択できない。

コミュニティ奉仕活動は、最高で禁固11か月の比較的軽い犯罪に対する選択肢である。刑罰は時間単位で科せられ、受刑者の余暇時間の間に実行されることになっている。

刑務所収監は最も重い刑罰で、18歳未満の場合には刑務所には収監されず、若年犯罪者を対象とする閉鎖施設でケアに服することになる。犯された犯罪が非常に重い場合には、たとえ18歳未満でも刑務所に収監される。

通常の刑務所収監の刑罰には14日から10年の刑期がある。一つ以上の犯罪が行われた場合には最高で18年の刑期が与えられる。刑務所収監期間の3分の2を経過したとき、残りの期間は監督あるいは保護観察に服することができる。最も刑期の長い終身刑は、刑に服する期間が定められていない。しかし、収監者が少なくとも10年間服役したときに、裁判所は終身刑を有期刑にすべきか決定する。終身刑は21歳未満の犯罪者には適用されない。終身刑が科せられる可能性がある犯罪は、殺人、営利誘拐、スパイ行為、放火、および政府転覆行為である。

統計

スウェーデンの刑務所の収監者数は通年でおよそ10,500名、一日当たりの平均では4,783名である。女性は711名で通年収監者数の7%に当たる。刑務所収監者が犯した犯罪のうち最も多いのは薬物関連である。2007年9月11日

時点で終身刑に服している者は160名で、うち5名が女性である。全員について殺人罪が立証されている。2006年には2,903名の外国人が刑務所収監刑に処せられたが、これは全収監者の28%に当たり、彼らの出身国は114カ国にのぼる。

Kirsberg刑務所の一日

07:55 房開放、朝食

08:35 棟から出て作業

11:25 昼食

12:00-13:00 ウォーキング

13:30 作業再開

16:30 作業から帰り、夕食

17:00-18:00 その日によってウォーキング、体操、教会での礼拝など

19:45 房閉鎖および夜間施錠

職員

スウェーデンでは刑務官になるための特別な教育はない。刑務所や保護観察部門に勤務する全職員のわずか20%しか大学で3年以上の教育を受けていない。刑務官に限ると6%のみとなる。刑務官養成教育は、すべて刑務所や保護観察部門の特別ユニットで行われる。

刑務官になれるのは25歳以上であるが、刑務官の大部分は25歳から44歳である。刑務官は勤務時間が不規則で、夏季休暇中も勤務があり、給与も高くないので長く勤務する者は少ない。9,200名が刑務所および保護観察部門で雇用され、うち5,400名は刑務官である。女性の割合は全体の45%で、刑務官に限ると33%となる。

プロフェッショナリズム

Kirsberg (=シーズベリ) 刑務所の私たちが勤務するユニットでは、主として薬物中毒者を取り扱うが、収監者の多くが非常に若いので、刑務官は彼らが更正できるように励ますことが最も重要な職務となる。Kirsberg刑務所は非常に古い建物なので、職員は収監者と非常に近い距離で勤務しなければならないが、このことは一方で収監者と多くの接触を持ち、何度も会話することを可能にする。収監者と会話したり討論するときに留意することは、会話を快適なレベルに保つこと、討論では常に収監者を打ち負かす必要がないことなどである。収監者に対応するときの非常に重要なツールは、ユーモアであることは言うまでもない。

薬物依存と治療

薬物中毒による収監者の多くが依存しているのは大麻で、アンフェタミンやコカインも一般的に普及している。アルコール依存はあまり一般的ではない。多くの薬物依存者が第二のドラッグとして薬物と一緒にbenzodiazepinesを使用している。

Kirsberg刑務所には、収監者が薬物に依存する必要のないライフスタイルに専念するための特別な収容棟がある。ここでは治療のためのプログラムが行われる。スウェーデンで使用されている治療プログラムの多くは、カナダのそれを参考にしている。治療プログラムに関してはカナダの矯正部門は世界で最も進歩的である。

釈放準備と刑務所外での治療

刑務所に収監されることに慣れると、収監者は刑務所の生活が自然になり、刑務所外の生活が自然ではなくなることもある。刑が終わりに近づくと、刑務官は収監者と話し合い、釈放後に治療を受けるための治療施設を探し、収監者の申込を補佐したりする。刑務官は収監者とソーシャルサービス部門間の連絡役としても行動する。

12. 保安(ハードとソフト)

ハードな保安とは、安全を増すために取られる物理的方策であり、ソフトな保安とは、人々が相互に影響しあうことによって作り出される安全を指す。ハードな保安は改善することが容易だが、ソフトな保安はその本質が複雑なため改善ははるかに難しい。最善の安全を確保するためにはハードとソフトの保安が一緒に使用されるべきである。ハードな保安として、Kirsberg刑務所では定期的に房、建物、用地や収監者について、薬物や武器など持込禁止物の有無を調べる。薬物探知犬の導入や収容施設や房を除く刑務所施設へのカメラの設置も行っている。

一方、Kirsberg刑務所の強みはソフトな保安にある。刑務官は収監者の間近で勤務するため、彼らのコントロールがより可能となり、彼らの行動の異常を見つける機会が増すのだ。収監者の近くで毎日勤務することにより、私たちは彼らと人間関係を築き、制服を着た刑務官としてではなく本当の人間になるのだ。

(講演抄訳協力 樫原知子氏、抄訳文責 JISS所報編集部)

第69回 スウェーデンの生涯学習 — スウェーデンと日本の最前線から

産業能率大学講師
野崎 俊一

生涯教育の大国とされる北欧・スウェーデン。今回の寄稿は、旧?の講演(2007年12月17日・スウェーデン大使館)での題名「スウェーデンの生涯学習—スウェーデンと日本の最前線から」の要約である。紙幅の関係で成人教育の一翼を担う学習サークル(注1)を主に筆を進める。この学習サークルの実態については、所報333号でも触れており、また話の展開で重複する部分も多々あるがお許し願いたい。

国民教化運動の中で生まれた同国の成人教育。そして三大民衆運動(自由教会運動、禁酒運動、消費者と生産者運動)を基盤として発足した学習サークル。今や国民の間に重層的に浸透し、リカレント教育の象徴ともいべき民衆教育の担い手になっているといっても過言ではない。その数は国から補助金を支給されている主なものでも10団体に及ぶ。形態や基本理念は様々だが、この中でも100年にも及ぶ最古の歴史を誇り、かつ年間受講生数約300万人の3分の1を占めるABF(労働者教育連盟)が発刊する「知識のプログラム」(ABFの歴史—真実という名の財産)を参考に見てみる(英文からの翻訳)。

「抗議から生まれた一般活動」

ABFは将来において大きな助けになるだろう。全盛期に発生した他の様々な活動と同様に、労働者活動は古い社会のリアクションの欠如により生み出されたものである。現在の活動というのは、労働者の権利と経済体制を確保するための戦いである。政治的労働者活動は人々に発言権と他人との平等、社会からの利益を与えるために存在している。

消費者間の協力、適合協力は工場や施設での経済的奴隷という立場からの解放への貢献から生まれてきた。現在の活動はアルコール中毒者の束縛を破棄する効果をもち、貧しい人々に就職の機会を与える知識の創造が望まれている。教会での活動は独占的宗教、州の教会の圧力からの解放を目指している。しかし、社会に人々の活動が反映される以前に、私たち自身の手で解決しなければならない問題は多い。彼らは自分自身で自分たちの集会や講演を作っている。彼らは社会が自分たちのために何かしてもらうまで待つingことができない。彼らは自分たちにより適応体制を作るために、社会や個人資産家が動くという状況を待ち切れず、消費者同志の協力体制をとるのである。よって、彼らは、労働者活動を通しての要求があっても社会のシステムが供給しない教育や文化活動を自らの手で始めているのである。(中略)

また、こんな一節が綴られている。20代にABFの青年部役員を歴任したパルメ元首相が、文化的闘争の解釈について「私たちは私的資本主義階級のもとでは私たちの教育の考えを実行するのは不可能だろう」と。

同プログラムはまだまだ続くがこの中で、冒頭にあげた基本理念の興味を引く項目別の基本理念のいくつかを抜粋してみた。

「ABFの処世術」

平等性、協力主義、民主主義を基本とした自由で自発的な教育活動を望んでいる。さらには、労働者活動の価値の基準に従い、社会の変化に参加する労働者団体や生活、社会において組織のメンバーを教育する。参加する状況を作るのと同様に、全ての人々に教育と文化生活を選ぶ自由を与える。

「奨励と参加」

社会と民主主義化の過程に伴う様々な変化を奨励し、参加を促す。それは、ABFが協力組織として発展的、教育的活動として大きな力を持つことにより達成される。また、文化的、教育的政策や新しい考えを生み出すという一面もある。ABFは協力組織とその開けた活動をともに刺激するであろう。

「自由と自発性」

ABFの活動にとって自由と自発性という努力は非常に重要である。それは一般的な教育とは自由で、かつ、独立し

たもので、自発的で社会の義務教育とは異なったものであるべきだということの意味する。ABFは異なった三つの状況の人々(自由で独立個人、民主主義おいての市民、抑圧された労働者ら)を一つにまとめるのである。

「民主主義の発達」

ABFは民主主義の基本としての一般的な活動に注目する。一般的な活動の強調を通し、民主主義は発達することができる。ABFは単なる人々の投票に基づいた民主主義の解釈は受け付けない。さらには本当の民主主義とは、日々の労働や社会の過程による意志決定を人々の積極的参加によりもたらされることを要求する。ABFの活動は民主主義への不特定の崇拜、表現、言論、団体活動の自由を伴った労働者活動の価値を作り出す。ABFの価値は、スウェーデンの労働者の活動としてのABFへの参加とそれによる開けた説明により作られる。ABFの活動とは、単に知識や技術を発達させる機会を与えるにとどまらず、社会的、一般的活動の両方を巻き込んだすべての団体の討論へ刺激を与えるべきなのである。

「メンバーの訓練」

訓練というのは、組織のメンバーが専門的と労働をかなえる可能性を高めるには必要である。訓練とは、そのようにしてすべてのメンバーに達成されなければならないのである。メンバーの参加を邪魔するものは排除されなければならない。組織の目的と義務を刺激する討論に基づく組織への疑問に伴い、メンバーの訓練として計画される。組織の働きを簡略化し、労働と協力者のよりよい自然な形を作るのを発展させる活動に対してもその訓練という名の学習は貢献している。

これ以外にも「変化」「力のない人々に最もよくしてあげられること」「人道主義と国際化」「対話のカギ」「教育への視点」「自由で独立した個人」「民主主義においての市民」「変化」「選ばれた代表者」「労働に対する教育」「一般教育の性格」「あえてする教育への問いかけ」「批判的思考」「知識への一般的な視野」などなど、きめ細かく主義・主張が展開されている。

いずれにせよ、これら一連の引用文からすでに読者の皆さんも理解されたことだろう。つまり、それはいみじくも、民主社会への変革への要求や社会改革への先兵的存在の心意気が伝わってくるのである。これは今日においても脈々と伝わっている。その一つはかつて、私が試みたアンケート(1998年と2003年。対象はABFとFU・注2。調査は28項目)でも裏付けられる。

受講の成果

受講動機については講演の席上や所報・333号でも明らかにしたので割愛し、ここでは「学習サークルは単なる学習の場でなく、人々の内なる想像力や知的な親交、生活の楽しさといったものを開発し、育ててくれるような環境にある」との受講動機を踏まえ、「学んだことによる成果はどうだったか」の「受講の成果」について言及する。

「知識と技能が身についた」

まずは自分と周囲の人々の各項目別での反応。自分の項の、上位3は当然のことながら、「知識や技能が身についた」が回答58人中(複数回答)35人と過半数を占める。次いで「関心や興味が広がった」(14人)「健康になった」(7人)と、受講で未知の学問が人生に大きな影響を与えていることがわかる。この上位2項目に絞ったものを年齢別でみると、「知識や技能が身についた」という回答をよせ、職業別、年代の世代間の差はみられなかった。また、受講講座別でも、語学講座、教養講座、健康講座、趣味、実務講座とも差はあまりみられない。

「家族との対話」

これらとは別に、注目したいのは「家族との対話が増えた」「家族や友人の尊敬を得られた」「家族が励ましてくれるようになった」の家族3項目のいずれかに回答した人が79人中(複数回答)、32人と4割を占めたことだ。このことは、5人に2人は学習サークルが生活の中に組み込まれ、家族とのスキンシップや話題になっていることの表れとも言えよう。年齢、性別では、「友人ができた」が男女とも20代の若手層が20人中8人を占める。「家族が励ましてくれた」も15人中10人が示すように、若い世代にとって、家族や学習の場での交流が学習する上で大きな変化をもたらしていることがわかる。この傾向は職業別でも同じく見られ、年金生活者の無職層が20人中、6人いた。

「自己の成長と人生の充実」

一方、学んだ成果をどのような形で生かすかは興味あるところだが、受講動機、目的と連動していることが分かる。回答123人中、3割強を占めるのが、「自己の成長と人生の充実に」(43人)。年齢別では20代が20人、中高年の40、50代が各6人。続いて、「転職に」(27人)、「職場での資格取得」(16人)が上位3を占める。このことは、学習が労働市場政策と密接に結びつき、巷間いわれるスウェーデンの学習サークルは、日本のカルチャーセンターが趣味・教養講座を重視する「教養型」であるのに対し、「実務型」を裏付けているといえよう。

以下、「家庭生活の充実に」(7人)、「同好グループへの参加」(6人)「ボランティアなど地域、社会的活動に」(5人)「展示会、発表会などの出品に」(4人)。これら一連の項目を見ると、絶対数が少ない中でも、高齢者比率がいずれも1割を超している。このことは、余暇時間にゆとりがあり、それがそのまま地域活動を含めた余暇を楽しむことに結び

付いているとも言えよう。

「受講終了後のアイデア」

そして、現在受講している講座を修了後はどうするかと質問したところ、「継続する」と答えたのが78人中、ほぼ過半数の34人。また、「このサークルにある別の講座を受講」(14人)と、学習意欲が旺盛だ。しかし、「ほかのサークルに行く」が12人と意外に比率が高い。これは講座の内容に不満なのか、それとも学習サークルや受け入れ側の施設設備に何か問題点があるのか。この点をさらに調査すれば「答え」が出てくるかも知れない。

まとめ

以上、これまでの現地でのインタビューやアンケート調査からまとめた学習サークルの特徴は、重複するが、

- A 国民パワー育成の“車輪”
- B 自由、平等、機会均等の実践
- C 自分のペースとする学習
- D 未知の学問が人生に影響
- E 国の労働政策と密着
- F 国民の間に重層的に浸透

注1 学習サークルの名は、1845年にストックホルムで小さな集会があった時に産声をあげた。洋服職人で救貧医師だったエルミン(Ellminn)の呼びかけに応じた仲間や軍人、教師、学生、商人らからこの称号を与えられたという。「悪趣味と下卑た娯楽と闘う」ことを期し、また、当時のギルド制の旧癖を打破する意図があった。

注2 FU(Folkuniversitetet)国民大学 1942年設立。ストックホルム、ウップサラ、ルンドなど各大学付属の成人学習活動が合併して発足。語学講師の話だと、英語、フランス語会話コースが人気とか。

(編集部注 所報掲載の研究講座は、通常、編集部が講義から抄録するのですが、今回は講師の野崎さんが、ご自身で原稿を書いてくださいました。前読売新聞記者のキャリアを生かしていただきました)

第70回 スウェーデンの医薬業界と日本とのパートナーシップ ― 新たな展望に向けて

(株)クインタイルズ
事業開発部長
ヨハン・ウエストブラッド

私(ヨハン・ウエストブラッド)はヨーテボリ大学で5年間、日本語と国際ビジネスを学んで、10年前に訪日しました。日本ではスウェーデン大使館で日本の医薬品会社をスウェーデンに誘致する仕事に携わっていました。3年前からは医薬品開発会社「クインタイルズ」に勤務しています。

きょうは医療業界を通じて、日本とスカンジナビアがバイオテクノロジーに関して、どんなパートナーシップを構築していけるか、ということについて話したいと思います。

<スカンジナビアのバイテク会社と日本のパートナーシップ>

まずバイテク会社の定義から話しを進めたい。それは長生きのための薬を開発すると同時に、動物や食品をつくるにも適用されるような研究をする企業のことである。

その研究には莫大なコストが必要になる。開発にも、技術革新にも、また安全性テストなど多額の資金がかかる。ひとつの研究には8年から10年の時間を費やすことがあるし、マーケットに出すためにはベンチャーキャピタルを有効に導入する必要がある。

<欧州と米国のバイテク産業比較>

米欧を比べてみると、企業数はほぼ同数で、欧州は2163社、米国には1991社がある。従業員数は欧州9万6500人に対して、米国はおよそ19万500人で約2倍多い。研究スタッフも米国は欧州の倍の人数をもっている。資本は米国が欧州の3倍ぐらいのスケールで、利益も倍近くあげている。

特徴的な違いとしては、欧州には若くて規模の小さな企業が多いということで、米国には資金力があり、企業買収などが盛んで、すぐに企業が巨大化しやすいという点があげられる。

欧州は米国に比べて資金調達が難しい。そのため欧州の企業はアメリカのパートナーを探すことが多い。パートナーシップを数字でみると、EUとEU間で40%、EUと米国で50%、米国とアジアで10%の協力体制になっている。

<日本の企業と海外提携>

タケダやエーザイなど大半はアメリカの企業を買収している。タケダはシレックスを270ミリオンドル(約271億円)で、エーザイはモルフォテックを320ミリオンドルで買収した。しかし日本独自のバイテク企業の規模は小さく、技術開発会社は主にアメリカと関係が密でライセンス契約を結ぶケースが多い。投資に関しては欧州にはオフィスすらもっていない会社が多く、もっと欧州に進出しビジネスチャンスを広げることができるのではないかと思う。

<欧州のバイテク産業>

バイテク企業の数をみると、ヨーロッパで一番多いのはドイツの538社、次いで英国の457社、そしてスカンジナビア3国(ノルウェー、スウェーデン、デンマーク)の362社になっている。

スカンジナビアのバイテク企業は資金を得るためのパートナーが必要だ。米国に比べてリスクをとる投資家が少なく、アジアとのネットワークも弱い。

スカンジナビアとしては、日本は重要なパートナーとして長くつき合えるのではないかと思う。お互いに高い質を持ち、スキルもあり、文化的にもスウェーデンはヨーロッパの日本ともいわれほど勤勉で、よい協力ができる。アジアでのマーケットを共有できるだろうし、日本の技術をスウェーデンの医師が試用して欧州にアピールするということもできると思う。

<スカンジナビアのバイテク企業の将来性>

国際競争力をみると、スカンジナビアはトップ10の中に5ヶ国がランクインしている。また、バイテクのノウハウの特許数も多く、研究論文も多数発表しているというデータがあり、将来性は十分高い。

スカンジナビア諸国はオープンな交流をし、それが企業間の連携にも見出されている。糖尿病やうつ病などのヘルスケアの分野で、企業だけでなく大学や政府の協力し合う関係にある。たとえば南スウェーデンとコペンハーゲンが提携する「メディコンバレー」などは、その代表的ケースである。「メディコンバレー」は病院、企業、大学がネットワークでつながり、約4万人がライフサイエンスに従事し、競争力を高めている。

<スカンジナビアのバイテク研究の問題点>

バイテク研究のためには巨額な資金が必要である。先述したように、スカンジナビアのバイテク企業は大きな投資も期待できず、企業や大学や研究所が資金を融通し合うような協力が大事だ。

2002年にバルト海周辺の国と都市合わせて24の地方が参加して「スキャンベルト」という連合体をつくった。協力体制の具体的なケースで、ここにはロシアやドイツも参加し、60の大学と1億人規模の人間が関係し、あらゆるバイオテクノロジーのネットワークを構築している。

<日本とスウェーデンの関係>

日本とスウェーデンはパートナーとして、バイテクの会社、製薬会社、医療器械の会社、ベンチャー企業を対象にライセンス契約なども含めたビジネスができると思う。

スカンジナビアにはすぐれた企業があり、研究所もインフラ設備も整っている。

日本の企業は米国だけでなく、将来的にはスカンジナビアとも大きな協力ができるのではないかと思う。

(講演抄録文責 JISS所報編集部)

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

スウェーデン語に教わったこと

スウェーデン社会研究所 会員
林 壮行

35年前のストックホルム大学

わたしがスウェーデン語を勉強したのは1973年のことです。ストックホルム大学がフレスカーティという地に移籍して数年後のことで、付帯施設などは建設中でした。いまは地下鉄も開通してユニバーシティエット(大学)駅がありますが、当時は市内からバスで通学したものです。

昨年、35年ぶりに訪れて驚きました。校舎は多少古びていましたが、施設や周囲の環境は見事に整備され、新しく広い学生食堂ができ、広々としたキャンパスは緑一色で、35年前とは隔世の感がありました。

校舎は当時から欧州の大学のイメージはありませんでした。白いプラスチックのようなボードを貼り合わせた外壁で、近代的な工場のようなイメージでした。内装も白がベースになっていました。廊下に沿って広い窓がとられ、陽がさんさんと射し込み、明るくモダンなオフィスという印象でした。歴史のある英国のオックスフォードなどはまったく違って、学びの府というイメージはありませんでした。

35年が経過して、外壁は光沢を失い、内部はくすんだようにみえて、往時とは違った感慨を受けました。

日本人は区別された

ちょうど1973年から、スウェーデンは日本人に対して入学の条件を厳しくした、といわれました。日本の大学在籍証明が必要になったのです。英語で書かれた成績表と証明書を用意しなければ、スウェーデン語学科に入学を許されなくなったのです。わたしは日本の大学を卒業した直後で、卒業証明書も必要でした。

ストックホルム大学のスウェーデン語学科は、外国人の学生が大学で勉強するために必要な語学力をつけるためにある、といわれました。対象となる外国人は、自国で学ぶことが難しい学生たちでした。政治的、経済的な理由で進学できない外国人に、教育の機会を与えることが優先されたのです。日本人のように、自国で勉強のできる学生たちには、一定の制限を設けることにした、というのです。

ちょうどスウェーデン経済が斜陽化の兆しをみせ始めたころで、税金の使い方がシビアになったためだと、言う人もいました。遊び半分の学生に無駄な税金を使わない、という姿勢があったのだということです。それなりの説得力がありました。わたし自身は遊び半分ではなかったのですが。

ジュリー・アンドリュース

スウェーデン語学科は4段階のレベルがあり、それぞれの段階で進級試験がありました。3段階まで合格すれば本校の授業を受けることができます。一段階は3ヶ月の履修時間があてられます。ストレートに合格して行けば1年間で卒業することになります。短時間でマスターしなければいけないので、中身は濃くタイトでした。

授業は週に3度。それぞれ3時間程度でした。クラスの学生数はおよそ20名。中国や中近東、東欧諸国からの学生が目立ちました。

担当の先生は、ブリット・ホルムという40歳半ばの女性でした。発音がきれいで聞き取りやすく、やさしく、笑みを忘れず、ちょっとアメリカの女優ジュリー・アンドリュースに似たまなざしの先生でした。すべてスウェーデン語で授業を進めました。文法、ヒアリング、オーラルと、読み書き話すことすべてを学習します。イヤホーンをつけて、先生が学生一人一人に注意します。正しく発音できるようになるまで、何度も繰り返してやらせます。

笑顔が優しい分だけ、見据えられたときの瞳は幾倍も冷たく感じられ、相当な威力がありました。指導そのものはかなり厳しい方でした。

ノーベル賞作家の副読本

前述したように授業は週に3日、それぞれ3時間程度でしたが、宿題が多く、学生は復習予習に膨大な時間が必要になります。とくに、厳しかったのは4段階を終了する試験でした。試験のための副読本が指定されるのですが、それを独習するのです。

わたしたちの時には、パール・ラーゲルクビストというノーベル賞作家の「真実の客」という本が副読本にされまし

た。授業は行われないので、辞書引きから解釈から自分でやる。どんな試験になるのか想像が付きません。最低でも2度は読み通さなければいけない、と指導されました。試験当日、ホルム先生がイヤホン越しに、こう質問しました。

「おじさんの葬式の帰りに、主人公はどんなことを感じましたか？」

幸い、その場面は印象的な出来事があり、主人公は、人間の死と自然の脅威に震えた、というのを覚えていたので、答えることができました。それにしても、これを文章で書くのではなく、口答試験で話さなければいけない。独学で本を読み、理解して、それについてスウェーデン語で話す。日本では経験のない試験で、ここまでやるから語学力がつかのだからと叱咤されたように感じたものです。

道程

ラーゲルクビストは詩も書いていました。記憶にあるのは「雷よ、雷よ」というフレーズで始まる、力強い韻を踏んだ詩であったということです。高村光太郎の「道程」を想起した記憶があります。わたしが、日本人の作家と対比して話したのを気に留められて、先生はいくつかの詩をコピーしてくださいました。ホルム先生のそのような熱意が、わたしを最終段階まで導いてくれたのだと感謝しています。

日本の大学のマンモス講義では考えられないことです。日本でもゼミナールや人気のない語学講座は少数授業という形になりますが、内容の深さと厳しさという点では比較にならない。よい経験ができたと思いました。

乳母車

本校の学生にも驚かされました。構内を乳母車が行きかうのです。赤ん坊を乳母車に乗せて、授業を受けに来る女子学生がいる。かと思えば、ずいぶんと年を食った学生もいました。教授のほうが、学生よりも若くみえるのです。日本のキャンパスでは、およそ考えられないことでした。いろんな国から学生がやってきて、国際色が豊かなのはスウェーデンの政治体制と基本姿勢、欧州という地理的条件もあつたでしょう。それに加えてお母さんから、おじいさんまで学んでいる。語学を勉強するだけでなく、大学の存在理由について、いろいろなことを考えさせられました。

家族のための学生寮

学生寮も違いました。独身用と家族用の2種類があるのです。独身者用の寮はマンション形式で、およそ60平方メートルの個室でシャワーつき。食堂は共同で各階にあり、冷蔵庫には自分の名前を記入したものを収めておく。寮費は忘れましたが、かなり格安だったのはたしかで、35年前としては、実に恵まれた環境と設備でした。

それよりも驚かされたのが、家族用の学生寮です。独身用とは別の敷地に、3LDKの広さをもつ平屋建てが庭を挟んで並んでいました。こちらも格安で、夫婦のうち一人が学生なら住むことができます。寮費が安いので、経済的な理由から大学に籍を置き続ける人間もいる、と聞きました。わたしは妻帯者で、別に部屋を借りていましたが、学生のための住宅援助を受けました。家賃の25パーセントが安くなったのです。もともと、これは社会人になってからは返還しなければなりませんでした。誰もが要求できる権利で、日本との違いにため息がでたものです。

北欧無宿

わたしはよく図書館に行きました。勉強するためでなく、日本語の新聞と本を読むために、でした。

大学の図書館には1週間くらい遅れの「朝日新聞」が置いてありました。いまはインターネットで、どの国の新聞を読むこともできますが、当時はまったくかながえられないことでした。また、集英社の「日本文学全集」もそろっていました。これは貸し出しもありました。どなたかが寄贈されたのかもしれませんが、当時は電話代も高く、本などの送料も高く、大学の図書館はずいぶんありがたい存在でした。「朝日新聞」で「北欧無宿」とタイトルをつけられた、わたしたちのような人間についての記事を読み、読み残しの文学全集を読破できたのは、よい思い出となっています。

「この花」と言ってみてください

そんなある日のことです。新聞を読んでいる私に、二人のスウェーデン人の学生が、こう聞いてきたのです。

「キミは日本人だな。ちょっと聞きたいことがある。この字を発音してくれないか」

かれの手には「花」というのと「鼻」という、二つの漢字の書かれたノートがありました。わたしは、お安い御用だと、それぞれイントネーションに気をつけて発音しました。「キミらにはできんのだろう」ーちょっとえらくなったような気分でした。スウェーデン語に悩まされていたから、よけいこ「教えてやろう」という気持ちが強かったのだと思います。

皆さんも、発音してみてください。二つの文字は、まったく違うイントネーションになるはずですよ。

すると、かれらは、ちょっと緊張したような表情を浮かべて、次の質問をしてきました。

「じゃあ、このふたつを発音してみてくれ」と、別の用紙を出しました。

今度は「この花」と「この鼻」と書いてありました。接頭語をつけて、発音してくれと言うのです。

もう一度、皆さんも、声を出して言ってみてください。

どうでしょう。イントネーションの違いがあるでしょうか。

「この」をつけると、二つの違いは分らなくなります。

わたしの発音を聞き、わたしの戸惑いを見て、二人のスウェーデン人学生はニコリともせず、「同じ発音ですね」と、確認を求めてきました。わたしは何度も、「この」をつけて鼻と花を比較しながら、ぼそぼそと発音しましたが、「同じで

すね」と、なにやら敗北感をおぼえながら返答しました。

かれらは、日本語を研究している学生でした。わたしがスウェーデン語をマスターしようとしていたときに、本校の学生は、そのように微妙に違う外国語のイントネーションについて研究していたわけです。それが、どんな目的だったのかは別として、そのような方向からの言語のアプローチの仕方があるのだと教えられ、言葉を学ぶということについて未熟なわたしに別の認識が生まれたのは、よい経験になりました。

語学学習の意義

語学学習には色んな意義があると思います。その国の言葉でコミュニケーションをとれるようになることは、そのほんの一部です。外国語を理解しても、母国語で十分に表現できなければ、学習の意義は薄れます。どこの国語であれ、コトバを理解する力が必要になります。何をどう表現するか、ということ自分を持っていなければ、外国人ばかりか日本人に対しても話ができません。自分の考え方をしっかり持つことが、語学学習には必要だと思います。逆に、語学学習を通して、それがいくらか身についたような気がしています。少なくとも、そのように考える姿勢をもてるようになったと、わたしはスウェーデン語に感謝しています。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.



JISS所報

2008年03月31日発行・・・所報No.342

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。

応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1 応募資格

特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受け付けません。

2 内容と字数

北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字(程度)、1,600字(程度)、3,200字(程度)のいずれかの文長をお願いします。

(まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい)

3 掲載の可否と掲載時期

掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。

送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4 謝礼

ご投稿への謝礼は無料ということをお願いいたします。

5 原稿の送付先

原稿は、「JISS事務局 所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.